

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 3



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

◆第一歌集の頃

中島義雄

110一九年三月号（通巻七三〇号）

◆歌増月旦

毎日芸術賞の栗木京子氏

磯田ひさ子

◇今月の二十首詠……西日本豪雨

若松喜子

198

■作品[A]

中島央子・中島義雄他

4

A

檜垣美保子・石塚貴美恵

50

B

B

浜脇景子・眞庭郁子

72

C

C

久土目薫・荒川信明

65

■オリーブ集

西久保佐和子他

52

A

檜垣美保子

77

A

B

浜脇景子

50

C

C

久土目薫

65

◇今月の二人

黒瀬紀子・酒井牧他

44

A

檜垣美保子

77

A

B

浜脇景子

50

C

C

久土目薫

65

香川進の生きものの歌

5

田土成彦

15

支社・グルーブ掲示板

(茨城)

久我田鶴子

18

〔編集部〕

久我田鶴子

18

A

檜垣美保子

18

B

浜脇景子

18

C

久土目薫

18

■本村誠人歌集『オカリナを吹き鳴らして』批評——

金澤孝一

38

第13期オリーブ集メンバ一発表

(茨城)

御代田澄江

97

〔編集部〕

御代田澄江

97

A

檜垣美保子

97

B

浜脇景子

97

C

久土目薫

97

慈しみと誠実さ  
「夢・実現」をかかげて

高尾恭子

42

福島発・風のたより

久我田鶴子

100

〔編集部〕

久我田鶴子

100

A

檜垣美保子

100

B

浜脇景子

100

C

久土目薫

100

◇アンソロジー  
〈春愁〉

菊地栄子

42

クリップ

103

神田通信

104

〔編集部〕

久我田鶴子

104

A

檜垣美保子

104

B

浜脇景子

104

C

久土目薫

104

■遊覧寄港  
〈映画「動乱」より〉

関根和美

71

〔写真・歌合わせ〕

作品募集

表3

私と短歌との出会い  
(199)

来栖万佐子

19

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 西日本豪雨

若松 喜子

これまでの経験にあらぬ豪雨とぞダム下流域のわが町襲う

二十四号中国地方を逸れたりと予報士伝う あっけらかんと朝

漏水の検査おわれば明日にでも給水はじまると町内放送

城壁のことく見上げし野呂川ダム堰堤に決壊のおそれのありき

四頭の仔牛生まるというニュースあの日濁流に浸かりし牧舎

泥水に首まで浸かりし黒き牛映像だったのか実景だったのか

氾濫せしるさとの川三津大川ずたずたに切れ崩れし舗装路

小石積み流れ堰き止め昼夜みふるさとの川にひとり遊びき

昭和二十三年生まれ。  
昭和五十二年入会（青風グループ）、  
平成二十五年より昂クループ所属。  
歌集に『砂嘴のソクラテス』がある。

店頭になんと小粒な早生蜜柑ことしの夏の灰色の空

水道局より応急止水の知らせ届くいまだ復旧の進まぬこの町

小骨をとり一尾丸ごとたいらげぬ確かな食思三人の孫

きっとそれおんぶばつたよ 昼下りヘルパーさんと図鑑を拡ぐ

ひとつに十キロの米を消費せる三人家族わが家の食欲

柚の皮甘く煮詰めて「あれ」「それ」ママレードの語ようやく出<sup>い</sup>す

朝凧の海が見たくて助手席に坐るわたしは背筋を伸ばす

堤防の途切れたるところ対岸の石油タンクの上の夕焼け

形よきプラジャーのような雲あればもう少し頑張ってみようと思う

赤き実は鶴の木なりと教わりぬ歩行訓練の道二百メートル

握手して友と別れぬさびしいのは師走の雨の降り止まぬ昼

スウェットにくつづいてきし大かまきり隣町からようこそわが家へ

# 作品 A

中 島 央 子

釜揚げ白子

森

永 塚 節 子

残り花

銀

子と二人暮して互ひにいやしあり仔犬を伴の一泊ドライブ  
ひさびさに墓参はたせり夏柑の陽に照る庭をひとまはりして  
冬の日の晴れわたりたる古里の主亡き石路黄のみじかく  
寄り道し田子の浦港に求める金あげ白子二合半山もり  
新雪のとほき山脈ふりさけて午後三時すぎ東名高速にのる  
のろのろと入るも出づるも渋滞の紅葉の丘のサービスエリア  
首都高速のカーブ多きを駆け抜ける助手席のわれ足をふんばる

中 島 義 雄

いのち

岡

萩 葉 子

花 豆

銀

野に凍ててゆく冬草の硬直を蹴りて残生の歌を詠むべし  
父母の筆より奪ひし魚よりも一首を得たる頃是なさよし  
戦ひに病に保ちし命ゆゑ死ぬまで生きむと拍手を打つ  
わが矜持職場にありと念ひつつ実のいのちは歌にありたり  
考へず詠まず書かざる時はなく頽齡の今も胸をくすぐる  
この子らを父母を如何にか養はむ寝ねゞ懷ひき絶食の日々  
振り捨てし面影ひとつ行きどころなく老殘の胸にただよふ

たちどころに一首うかびて書きとめぬ 3B鉛筆ルーズリーフ  
ゆづくりと花豆煮る日を作れずとうとう師走風肌寒い  
とちおとめのアイスの実なりストーブの部屋で娘とふくみていたり  
昔のように降りはしないというけれどやはり恋しい古川の雪  
履くこともなく半世紀雪下駄は伯母からの贈り物 傷びておりぬ  
しばらくぶり 夕日が隠れたビルみつ娘と午後の紅茶いただく  
はらはらときどき家族でみている「はじめてのおつかい」

# 白子れい 枯れ葉

・洛

# 浜本英美

花の伝言

・夢

浮かぶ雲あかねに染まり笑みきたる指先じんじん霜ひかる朝  
干されしる疏水の底に塵芥悪臭放つ師走に入りて  
ふんわりと足裏に優しきもみじ葉を躊躇いつつも踏みしめ踏みしむ  
「大」の字を眺め下ればカラカラと枯れ葉敷葉われを追いこす  
一陣の風にさそわれ散りきたる枯れ葉のいくひら帽子をたたく  
ほっかりと白き半月うかびおり西の山の端いまだ陽あるも  
一步いっぽ新しき年近づけり過ぎしは悔やまず明日に向かわん

## ぱぱりょうこ

オカリナ

・鹿

平成の世代交代をねぎらいてオカリナを吹く男の横顔  
平成の終りとなろうその月に私もさらりと衣替えしよう  
自己責任と言い論すこのあいまいさ我を歎き生きゆく手段

雪うさぎのおめめにしようと万両のひときわ朱き実ふたつを選ぶ  
あとは雪がふればよいと天仰ぐゆきうさぎひとつ作れるほどの  
お年賀は元日の朝つつしみでしたためるべきとす初春の筆  
いのししの年女にはあらねども猪突猛進と洒落ようじやないの

## 浜谷久子

忘年会

・地

友四人忘年会は奈良町に癌発見の直後の一人も

胃の切除控えて気丈の談笑は入院中の留守宅水遣り  
支え合う四十年のつき合いは「ご近所さん」の顔の間近に  
年齢の異なり互いの感覚の異なり均す祈り合い崩らか  
年月に氣心知れてさりげなく日常見守るまなざし温か  
それぞれに嘗む暮らし必要とあればいつでも何はさておき  
スマージーに始まる会食アルコール無しも会話の切ることなく

## 福田庸子

砂丘の街

・今

ひかへめに寄りくる鷗荒海を耐へては生くるいのちなりけり  
砂丘をくだれば街は広がりぬ海近き街新潟の街  
拉致船がたくらみし浜砂丘をうすく残して街に続けり  
拉致船を停めたる浜は間近なり勢ひ失せて松は残れり  
砂丘館と名を変ふ旧き支店長宅街を見おろす丘に残るを  
めぐみさんの父が勤めし銀行は砂丘をくだる街にし今も  
砂丘の裾をめぐりて真向へば島影太く佐渡迫りくる

レモン水のみどをくだり身の芯へこんなさわやかな言葉を欲す  
「霸王樹」はわが師暢子が若き日のいのちの歌を託しし結社  
電線の濃き影などり飛ぶ蝶のわが目をのせてふわりと空へ  
うつうつとくねくねとする身の内へ青竹一本欲しきこの頃  
医院へゆく夫を見送りてアスファルトの溜りの雨をみつめて佇ちぬ  
あの日の、赤き夕日が根の国へ母を連れゆきし五十年経つ  
百日草あるかなきかの風にゆれ風に託さん花の伝言

## 檜垣美保子

影

・昴

しらかべに影絵のきつねの横顔のふたつ向き合いおさなこの声  
立ちてなす放尿はまだ三回目二歳男子のほこらしき背  
男の孫のどこまでつづく呪文かな「ちんちんぶらぶら」笑い転げて  
ひかりさす壁にあわわうつりたるわたしの影がわれに手を振る  
鳶一羽川面近くに急降下にんげんの目には見えぬなんにも  
さわざわと湧く胸さわぎ絨毯の赤き毛脚を逆なでしつつ  
鳥の群れ西へ西へと巨大なる鳥のかたちをなして飛びゆく

藤田美智子

灰色の空

・新

牧雄彦

もみぢ

・大

平行に互ひの位置を保ちつつ白鳥がゆく灰色の空  
灰色の空ゆく二羽の白鳥が雪を呼ぶらし白きひとひら

山茶花の散りし花びらの重たさを受け止めてをり積みたる雪は  
干したまま冷氣吸はせてしまひたるシャツの袖より悲しみがくる  
たやすかりし動作も儘ならぬ自らを受け容れがたく凍て土を踏む  
川の面を石がびゅんびゅん切りてゆく轟きリズムを身の内に欲る  
ハイジを使ふ学習塾のCMに家族三人それぞれ怒る

藤森巳行

正しく清く

・銀

人生の指針と決めて歩みたり正しく清くそして貧しく

金持ちは何か不正をしてゐると貧乏人の我の言ひ分

歳の財貯め込むよりも心の財積みゆくことを仏は教へぬ

信念に生きる人生歩み来て心の豊かさ実感をせり

何ものにも揺るがぬ人生確立を祈りて朝の勧行をする

日産車今日まで八台乗り継ぎぬゴーン逮捕に腹を立てをり

七五調生命のリズム刻みつつ短歌の道を今年も歩まむ

船田清子

お岩さん顔

・天

ガッバーンコンクリートへ一瞬にたきつけられ「お岩さん顔」

竿掛けのフックの折れたる所為なるに善處おこたれり我が落度にや

左手と肋骨のヒビより貰め来たる痛みに堪へてのろまなる家の事

「今日すべきを明日へ延ばすな」小学校の担任の言今ぞ身にしむ

世の事故もなべて同じき怠りに、その内にではなく今すぐでせう

神武景氣を越ゆやと今年の好景氣 その恩恵はいづくに積もる

キジルなる千仏洞と鳩摩羅什の像映りてゆかし龜茲國

金剛家の雪の小面三井家の花の小面相まみえたり  
太閤の愛でし小面ときの間の何をか語る朱の口あけて

下服れの小面をつけ舞いいするいにしえ人の息の滲むも

亡き妻のうれいは細くまみに引きおもて打ちたる銘の「をもかげ」

小面の主幾代すぎゆくも微笑を湛うるこの世を生きて

伝孫次郎銘「をもかげ」のひろらなる肩間に射す光おぼろに

戦びとひとさしを舞う時ありて抗う命すくと立たす

松永智子

跡

・嵐

曼珠沙華さく睡の道ことばなく歩みし日のありすでにしとほし  
土手に立ちおほきおほき落日を見たりき赤く燃ゆるをみたりき  
おどろきの声呑み見たり燃えながら沈む夕日に立つ彼岸花  
先をゆく人らの踏み跡ならむ夢の中なる聞なれば踏む  
かなしみていひしことばをかなしみて聞くことなく彼岸花立つ  
とづる目にいまに見えくる彼岸花あかあか沈むおほき落日

・羊

## 三 浦 好 博

過去よりの星

・銚

御代田澄江 山茶花

・茨

沈黙の知らぬ同士と見上げをりエレベーターの階の数字を  
灯を消して湯宿の窓に過去よりの星仰ぎる喜寿なる我は  
蝙蝠と夕焼け空をひとしきり眺めをりたり雨戸を閉めむ  
火の鳥を幾羽たたせしカンナかな師走の磯に崩れつつ咲く  
枯草の覆ふ空き家の二階なる眼窓に今宵の満月のあり  
戻りたる寝屋に双子座流星の降りやまぬへし五個見し後も  
本質は遠ふに二宮金次郎歩きスマホの為に撤去ぞ

宮 本 靖 彦 洲本城

・凌

玉ねぎの町に戻りし故郷の山に孤高の洲本城立つ  
藍色の海風寒し西日返す洲本城ひとり幾世見守る  
赤煉瓦残るこの町道広くシャッター通りに若者を見す  
大工場退きて廃れしこの町に町興しの茅本町に見ゆ  
洲本港水面のゆらぎ変るなく混み合ふ汽船に行きし日憶ふ  
山茶花の紅葉開の生垣をすぎて空家となるに気づきぬ  
動かざるスマホ操作に悩みつつもデジタル世界に入る心地す

三 好 聖 三 餘

・伊

飴ひとつ口に転がしながら乗る冬の電車の長椅子のすみ  
構立てて無人の駅に降りる真夜まずは煙草をふかすことから  
戦争は理屈なしで悪である金子兜太の直言を聞く  
侵略をいまも認めぬこの国の無惨弱さを思う初春  
がちがちに硬化してゆく世界へもしさかに船は桟橋を発つ  
いのししを捕えて殺す瞬間を見詰めてまなくチャンネル移す  
この村に生きて暮らして死ぬだろういすれ無用のほんくらのまま

茂 木 燐 錦帯橋

・埼

小春日を花の雅にて憩はせて紅深き山茶花の花  
冬蝶を止まらせ遊ぶ山茶花は蝶と遡頬を楽しむらむか  
女郎蜘蛛らんらんと眼光させて獲物を狙ふ夜闇の中に  
空の巣と思ふに昼は隠れて夜出でくると子に聞く女郎蜘蛛  
娘より家柿届く「これ食べたらお医者さん蒼くなるね」と礼言ふ  
運転の勞とりくれし友の荷に娘よりの柿をそつと包みぬ  
何ほとの歌も詠めぬに待ちくるる人ありと聞く有難きかな

錦帯橋バスを降りれば観光の記念撮影「お並び下さい」  
錦帯橋バスの駐車も河原なり「水没しない?」「するよ」とをばさん  
錦帯橋橋上にみる岩国之城は小さく小雨にけむる  
錦帯橋金槌ふるふ音のして橋板に浮く和釘を打つなり  
錦帯橋往復をしてトイレしてホテルに昼しもうバスの出る  
錦帯橋渡れば金運有りといふ白蛇神社に百円が減る  
錦帯橋たもとに「橋の駅」あれど時の忙しく次瑠璃光寺

もとむらしげと 心のセレブ

・そ

ブランドの店並びいるを価値として児童施設を拒む街あり  
億ションを買い移り住み満ち足りる心に虚しさ忍び込まぬか  
優越感あからさまなる言葉もて子を育てていることの危うさ  
その土地を故郷とする人ならば誇ることなしその土地の値を  
上からの目線にて言うセレブたち心のセレブではなかりけり  
心にこそ高き卑しきはありけりと島津いろはの「ろ」の歌に言う  
西郷も学びし島津のいろはうた薩摩の子らの精神となれり

八乙女由朗 はぶり

・柴

吉永惟昭 春光

・熊

現れて背<sup>せき</sup>向けたる冬の鳥光のあらぬ羽毛を見る

鶴鶴と寄りくる気配ありとせば葬<sup>はむか</sup>の兆か悩ますありて

行く年に逝く人ありぬ整えて師走に生れし葬おろがむ

昨年五月姉ら夫婦を失いて東京は遠き所となりぬ

修まりしは朝霞の墓と知るなれど無力のままに果てをおろがむ

やまい持つ妻に添う身を常とせば手本はありき岩本繁治

休暇ありて子は帰省しぬあたふたと電池調べて取替えゆけり

山下雅子

ピンクの車輪  
・福

校庭に枝張る桜と馬刀葉椎しのぶシーンは常に変らず

思春期に入りゆくひ孫と思秋期ともいわんか孫の父娘睦まじ

あきらかに初老の娘夫婦なり婚殿の白髪ますます増えて

博多より西洋皿のこのセット津軽江戸経て上総に睡る

煎餅をぱりぱり蓮根しゃきしゃきと昔ながらの歯応え旨し

梢先の尖りあらわの並木道寒の冷たさ櫻にわれに

陸軍のトロッコ走りし習志野原ピンクの車輪がその鉄路ゆく

横田敏子

木の香  
・森

鉛筆を削ればほのかな木の香あり喫けば昭和の教室浮かぶ

マジシャンのようスマホを操れどスマホ無ければ普通の男

歩みゆくわたしの影がすっぽりと雲に覆われわたしが居ない

夕茜燃えて薄れて日暮れていすこに消えし夕べの夢は

娘とのメール交換二回ほど言葉使わぬひと日暮れたり

小寒に紅梅二輪ひらきいて思わず寄りゆく朝日差す庭

真っ青な空消えていく北風が重い雪雲吹き寄せてくる

朝井恭子 新年

・森

テーブルに祝箸並めうかららの揃うを待てり一月一日

新しき年を迎うと眞白なるテーブルクロスに食卓被う

新年を祝ぐ丸き箸仏壇の夫にも供えうからと祈りぬ

元旦の餅独り食む年重ね人にも吾にも甘くなりたり

初詣での行列長し庶民我ら「無病息災」ひたすら祈る

注連縄の四手に吹きくる風もなく平成最後の正月のどか

ふるさとの弟の賀状に書きありぬ「楽しまんかな八十路越えても」

磯田ひさ子

八重ちゃん

・森

会はぬまま十年を経し従姉の計そらのま青の明るき昼に

姉のごとき一つ違ひのおちやつびい幼稚園も一緒なりしよ

チューリップの花を緑に葉を赤く従姉が塗ればそのままねで

厚紙の長き耳のお面つけお月見会にふたり踊りき

あさゆふに遊びしわられ結婚を境にとほくとほくなりにし

若き父母を持ちしわれを羨みしと七十歳過ぎて八重ちゃん言ひき

東京のきららを好みし八重ちゃんと反対のわれと篠き信ありし

市 原 志 郎 年去る

・萬

奥 田 清 和

木馬道

・大

仙台は子の住む所雪降ると電話の中の声はやさしも  
雪降らぬ石畳道ことことと妻押しきる車椅子はやし  
てくてくとりハビリとして歩きいる石畳道今朝は濡れおり  
千両の実赤赤と玄関にならべて新年を迎へんとする  
正月の買い物せんと広告を見入りて妻の何をつぶやく  
平成の年行くという年末に車椅子にて街を歩くも  
あと一ページとなりしカレンダー我が余生いくらと考へてゐる

市 原 や よ ひ

青き空

・萬

新年を無事に迎え二人なりそれのみでよし青き空みる  
年男孫とじいちゃん一人居て握手してお節の向こう  
正月に里に帰れぬ嫁の折る金色の鶴膳の片すみ  
断りの年賀状も入り来て寂しさふいにつきあげてくる  
同級生相つき一人逝たりと八十一歳の字を見続ける  
元気かと聞くも聞かるもすっしりと重くなりたる齡となれり  
ほんやりと信号の点滅見て居たり十年経しも馴染めぬ街の

大 浪 美 雪

野胡桃

・森

青白き水底に揺るる燃料棒石に封せられしを解きたる人はや  
胡桃とは言えど棘とげ野胡桃の小さき実のなか核などなくて  
粉ふきし干柿のなか放射状にひそみておりぬ細長き種  
骨だけとなりたる糞の頼りなさ赤き花咲く生地を張ろうか  
日本語はいすこへ行きしかカタカナ語マルシェなるは市場のこととか  
窓辺より猫と雀を見る我の後ろの正面何か迫らん  
地をゆける蟻にも黒き影のあり朝の日のもと影を引きゆく

先哲の修身齊家平天下言ふ人もなし聞く人もなし  
正に世は日進月歩と言ふやよし未来は知らずカオスならずや  
宿坊のふすま絵しみじみよしとして足らひるたりし坊城俊民  
とくとくの清水の法師あらしめばコンピューターに歌詠みますや  
吉野人登志夫秘蔵の桜木の銘木七本今も忘れず  
いくさ敗れ家族制度をすたらしめ国柄変へしは策略なりしか  
み吉野の象山の際の木馬道まぼろしにたつ鳥のしば鳴き

奥 田 陽 子

二羽翔つ

・羊

ひそひそと葉裏をわたる日白来て年ごとに見る山茶花の紅  
木がくれに移らんとする鳥の群ちさきさえずり花のかけなり  
喜びてかたみに拳ぐる声と聞く花の後ろをうつろえる影  
諦めるまでに踏み来しいくつかを思えりとおく山茶花の垣  
蜂蜜に癒やすのみとの痛みあり音なく降れる雨と気づかず  
音もなく來たりし水雨散りのこる柳もみじを震わせいるは  
二羽翔てる声のあかるさ裸木となりし柳の梢揺れいる

小 野 雅 子

九 九

・羊

われの行く出口はいづこ地下街に地上の景をおもひつつ迷ふ  
七十五年前をめらす二年生で習ふものなりかけ算の九九  
北風に對ふ道にて九九を言ひし戰災前の町とわたくし  
坂上に出て笑へば北風が生え變る歯にしみし遠き日  
「言ひ縕ふ」にしか今は使はぬ靴下の縕ひ常の仕事でありき  
ショッピングモールへ向かふ送迎バス目を輝かす人にあふるる  
歳晚の拭きたるガラス越しに見るきのふより寒き夕焼けの空

菊地栄子 つわぶき

・ 湾

國井節子 光源

・ 春

・ 漢

線描に落ち入りやすい水墨画省略と言う手法を見つむ  
容赦なく侵入するから容赦なく新聞まるめてコバエを叩く  
立ちあがり何せんとせしや洋服箪笥の扉を開けて佇む  
幾人か落ち葉を集め行きし道夕べは濡れて物音もなし  
つわぶきの十三枚の花びらのその数やよしづが誕生日  
「菊の花咲いて居るね」と声掛け松の木下は黄葉の明かり  
なさざれば生ざるものを師走きて最後とならんピーマンを摘む

木村文子 病院

・ 羊

風吹いて広場に枯葉が舞い散るを飽かず見ており窓辺に寄りて  
噴水の中に虹のかけらありここから見えるいまだけの虹  
少しだけ眠らされてまだ眠い顔のまま母還り来る  
心臓の鼓動を正しくするために電気ショックはまた使われて  
くちびるの不思議な赤さ全身に巡る血液思いて安らぐ  
救急の扉が開き看護師とストレッチャーが静かに帰り来  
吐く息が白くなつてああ冬だボブラーが小さくうなづいている

草刈十郎 烏瓜

・ 世

秋深み日ごと咲きし朝顔のいよいよ終楽章となりたり  
ごきぶりに羽根のあること忘れるしわれの眼前飛び立ちにけり  
山眠る前の彩りさまざまにいと華やきを見せてゐるなり  
秋深し何かよきことあるやうな予感りんこの皮をむくなり  
米寿迎へあれこれ思へどなんとなく今は花野にゐる思ひなり  
ゆく秋を惜しむがごとく遠山の入日集め烏瓜かな  
人影を見ることのなき廃駅に雀らいくつ日向ぼこする

今日の日が淡く消えゆく夕つ方娘に誘はれて神戸に向かふ  
娘の腕をしかと摑みて人込みをはぐれぬやうに駆ばぬやうに  
夜六時五十万個の光源の百花繚乱めくるめくなり  
かがやける光の芸術ルミナリエ老も若きも夜もすがら浮く  
震災の犠牲者何千み靈の前こころを込めて静かに祈る  
縦横にからみ合ひたる人の糸どこかで誰かと出遭へさうな夜  
よく見れば梅の花芽のつぶらなり寒に耐へつつ春待つこころ

小泉泰清 ダイヤ婚

・ う

ダイヤ婚労をねぎらひ小粒なるかがやき妻の胸に潜ます  
金婚に賜ひし湯呑は割るるなく手に温もりて十年も経つ  
柚子香る冬日に陸び六十年譲り合ひつ春と過ごしぬ  
六十年一人三脚励み來し健やかなれば更に伸び行け  
金剛石婚迎へわれら海に向くホテルに宿り日の出を浴びる  
まちにのこる小学時代のをの友らわれをふくめて九人となりぬ  
これを云ふいさをもたてずすこしきて春夏秋冬すなほにひたる

菊岡栄子 和む

・ 潤

歌の友の手作りとなるクリスマス・リース施設にありて氣分の和む  
想い出のいくつを語り傾く陽またの会う日を約束しつ  
八十三歳姉の逝きしを告別の式に出られぬことの哀しさ  
右の手の震えの募るうつし身は「そんぽの家」にスプーンもて食む  
右ばかり手足のふるえ増しくるを病名の無き不安うず巻く

河野繁子 寒空

雁

近藤栄昭

南月山

福

からすより美しき身形に飛ぶ河鶴あごの黄色をさし伸べる線  
若き日の孤独わずかに先があり老いてのそれには無の近くいる  
いすこより集まる鳩が極月に何組の群れ舞う寒き空  
いろ異なる老若男女の集まりはこの何年か師走の景色  
数うれば百羽に近きが電線に並びて鳩の反省の会

冬至のころ樹の上より昇りくる朝日の位置の変わらぬ地軸  
初日の出梢の林の木間染め元号平成おわるこの年

小西美智子 山茶花

大

山茶花の紅さわに咲く庭はいつの冬にもまさり華やぐ  
ニューヨーク・ウイーンフィルのコンサート聴きて今年のはやひと日過ぐ  
鳩の羽 五羽いれば五羽それぞれの紫みどりの配色ひかる  
真裸に立ちいるとき百日紅はなやぐ衣装を冬は脱ぎ捨て  
つんつんと花芽つき上げ白蓮の満つる力は空を指しいる  
うなだれて茎の垂れいしシクラメン介護數日首をもち上ぐ  
日の差せば朱色に燃ゆるシクラメンよろこびの声発することく

小林能子 「ハロー」

羊

TVドラマ鈴木亮平の「西郷どん」に親しみてなほ厳しき「道訓」  
地球市民に「西郷道訓」の語りかけ隣近所とのおつきあひ、マナー

遠くより日本を呼ぶ「ハロー」大歳に「ハロー」と彈む声が繋がる  
通じぬとき伝はらぬとき焦りたり母語の異なる独りとなりて  
反移民の海外ニュースに移民論議やうやく始まりしばかりの日本  
「いい日本人いませんか」印偽もあすへの人材獲得目指し  
子どもたちも笑顔で暮らせる町がいい 移民へのドア開くとなれば

坂上直美

マティス辞任

天

老兵は消え去るのみか汝が祖国見捨てていくかマティス長官  
自省録汝が愛読書と聞きしゆえわれも読みけりマティス長官  
アメリカは日本はどうなる明日の日の世界どうなるマティスの辞任  
もしかして世界の終わり戦けどトランプ蛙平然と行く  
どこへ行くどこなら行ける国境にとどめられたる難民の群れ  
約束の地はどこにある収容所歩き疲れて少年は死んだ  
国境に壁を建てる男は言うベルリンのように崩れるだろうに

無理せしか脛肉ふくれ引きつりぬ脚の古傷いたむをなする  
足つりの予防薬ツムラ68間に合うを願う吾より若き  
ローブウェーに変更できぬ道に来て二度目の痛み心なえ行く  
遠き道を選びし決断悔やみいる心に押されゆっくり歩む  
痛む足かばう下山の急坂を木々をさすりつ岩をなでつつ  
あと二キロ目測すればあのあたりつかまる小枝目先にさがす  
登り二キロ三時間を下り四キロ四時間足痙攣りくだる

坂出裕子 紅葉

・洛 椎名恒治 初夢

・橋

降り積もる紅葉すくひつこんなにも美しきもの世にありと見ほる  
買物の坂の行き来のごほうびにもみぢを拾ふ とき銀杏  
てのひらに載せてながむる七ツ葉のもみぢこの世のものならず美し  
台風の余波さまざまに忙しかる今年の秋のもみぢ散りゆく  
山の端の空あたたかきくれなるに染まり今日も無事に生きられ  
夕雲とおなじ色して半月が空に浮かべるあしたも天気  
街灯が順にともるを窓辺に子供のやうに立つて見てゐる

佐久間晟 日乗(一九)

・鷗

鈴木結志 天平の宝物(三)

・福

やがて春行くこともなきアナ森に思いは続く木の芽草の芽  
あの時にいけば良かった森奥のけもの道なる果てのその奥  
世の様の変わる姿に流されず九十余歳の身を支えんとす  
老いとは言うなど論されしこも今は昔九十二歳になりたる身には  
何せんと行くすべもなき旅なれど廣告に探る思い出の数々  
もう春か行くすべもなき野も山も語ることなく遠くに見つむ  
今日もまた生きていたのか目覚めれば明るい朝がわれを包める

佐藤道子 一大事

・甲

慈悲深き「孔雀明王像」の絵に今日の心をこよなく洗う  
筆致妙後嵯峨天皇宸翰にとりことなりて離れたしも  
渴筆の交じる後醍醐天皇の宸翰調和よく目に和む  
明王が孔雀に乗る絵本尊の菩薩御顔慈悲相に満つ  
梵字入り書写後京極良経の筆の練り技目より發う  
乙女時の妻に重ねる美少女の可愛いイレーヌ美的肖像画  
御室派のみほとけに会い天国の妻の安らぎこよなく祈る

世木田照比古

看護師

・茜

延命治療の有無を問はれてとまどひぬ緊急入院したるその日に  
歌あれば歌さへあればと云ふ人の羨しかりけり歌すらむなし  
大切な人の笑顔と話したく家事をそこそこベッドに添ひぬ  
傾眠とふ魔物が夫を捕へて日がな一日夢うつつなる  
眠りつづリハビリ体操する夫の時に笑顔の見えて楽しも  
杖ないか杖さへあれば歩けると動けぬ夫が夢にさがしぬ  
「今日は何日?」毎日間違ふ夫なれどさらさらと書く礼状早し

# 関根栄子 北限

・埼

遠き日の正月を待つ喜びのいすこへ消えしや厨に立ちつつ

この秋も蜜柑たわわに実りおり温暖化にて北限伸びしか

新年の掛軸選びも結局は「松樹千年翠」に落着く

ストールを頸まで巻きて霜の道鎮守の森のくらぐら見え来

年明けて何を始めんふと思う「年甲斐もない」の言葉のありて

箱根路を駆けぬけて行く若者の活力もらう新年もまた

元号の変るを待ちいる楽しみに「平成」の去るという寂しさも

## 関根和美

岐路

・埼

柿の実のいまだのこれる年の瀬は庭の南天喰われずにあり  
てのひらにおさまる厨子のマリア像ほほえむように憐れむように

ひと筋の道と思うに岐路多く迷うも折りのうちに示さる  
一瞬に分かりあいたるふしきさに辿る縁の濃くからみ合う

その名口にすれば涙をあふれしむ会うべくして会いぬこの人もまた  
少年の身にて異国へ旅立ちしカズオイシケロ・マリオ山野内

元旦の空は気高くさざなみのことき白雲およぶその果て

## 高尾恭子 新年

・大

チコちゃんに叱られている平成の御代三十年のエンドロールは  
ざわめきの消えた駅舎の木の椅子に螢光ペンがころがっている  
還暦をこえて若輩と言わされる薄い煎茶に茶柱たまり  
アルミ缶蹴りつつ帰る着ぐるみのようなコートに身を尖らせて  
お手塩とするする言える歳になり嫌な女の貌をしている  
あみだ鏡に横線一本つけ足してあなたと四十回の年あらたまる  
あらたまとの年の初めの旨酒よ鶴川の柳葉魚がほどよく焼けた

今生の別れとまさか思わざり姉の手握らず帰りし悔が  
二歳児を探し出したる尾島氏の本を喜びくれし姉なり  
とろとろと眠りにおちてゆく姉か午後の陽ざしがベッドを移る  
本心を見抜くから長けていし姉のかんばせ穏やかなりき  
「少し気が入ってきたわ」化粧する姉うつくしき最期の語らい  
肩寄せてともに号泣する人のぬくもりつたう姉の葬りに  
人の手を全く借りずあね逝きぬ あっぱれゆえにつのるさびしさ

## 滝田靖子 戊辰百五十年

・新

タイムマシンがあるなら見に行かねばならぬ戊辰の会津の悲惨のすべて  
斬りかかる少年を銃に撃ち殺すかかる狂氣も幕末のもの

少年の首を肴に酒を酌むかかる狂氣も幕末のもの

勝利せし者こそが正義敗れたる者に残酷な罪のありたり

戊辰百五十年会津の二本松の義といふ番組ことごとく見つ  
武士の説く道義とはいつたい何だらうポケットに手を突っ込んで歩く  
戊辰百五十年明治も大正も昭和もはるか平成終はる

## 竹下妙子 山茶花

・霧

冬の朝山茶花の白ひらきたりされどひそかに散りゆくをみき  
風花にのりて来ませよ亡き夫の影と重なる山茶花の白  
半月が暮れゆく高き空にあり見えざる半月何處を照らす  
山の霧わづかに動きにぼひ立つ南京黄櫈の緋色に染まる  
何色にも染まず生きてしまじみと独りのときは赤き色恋ふ  
寒さむと朝の光の射す川に鴨向きむきに思ひ漂ふ  
開かれむ明日といふもの信じつつ一気に閉ざす夜のカーテン

## 田 土 才 惠

窓越し

・宙

## 虎 谷 信 子

歳末・新年

・伴

窓越しに児島富士見ゆ青々と干拓平野に雨上がるとき

広これる干拓平野の長閑さをいまも抱きてわが胸のうち

手放してしまえば一度と見ることの叶わぬ庭に向こうの景色

いくつあれば氣のすむものか思い出を一つまたひとつ手に確かむる

母の手を温めし手袋はめてゆくわが町に吹く風におされて

祖先の器用は母の血を引きし妹の手の小物が並ぶ

紙人形いま色褪せて残りいる形見の処せんかたもなし

## 田 土 成 彦

冬の生き方

・宙

街灯のした過ぎてゆくわが影の伸びつつやがて消えてゆきたり  
甲板に砂袋置く海戦のならひは今もありやまたなきや  
集ひ来し孫六人のそれぞれに背丈伸びたりかさばるほどに  
隣席にスマホ操る指みれば人類の適応力に思ひ至りぬ  
意味も無くにんまりとするみづから放屁の音の大きくあれば  
チャウチャウとちやうかと問へばチャウチャウとちやうやうといふ返事返り来  
極限の適応として葉を落とす広葉落葉樹冬の生き方

## 玉 井 紗 子

アドベントカード

・羊

クリスマスアドベントカード君に出し二十四日間吾を意識さす  
日々めくる、まとめてめくる、めくらない　君を占うアドベントカード  
アドベントカレンターめくるワクワクが砂子のように見えしバブル期  
五十歳いまの君ならアドベントカレンダーに沿い聖夜を待てり  
クリスマスの意味違えてもアドベントカレンダーめくる子の目輝く  
クリスマスイブの窓には赤子の絵アドベントカードはEU製  
サンタクロース信じる気持ちを利用して子の物欲をお預けにする



暮れ早き冬至厨へ 今は亡き柚餅子を賜びし 人憶ひをり  
トンビマント 着こなし給ふ風流人。歳の市にて 逢ひし思ひ出  
蓄もつ石台とどき 玄関の、ややに華やぐ 歳末の日日  
背戸庭の思はぬ片すみ 水仙の、花咲かせをり 白きけなげさ  
新年の祝酒 喉にしむからに、先は長寿を 感謝申さむ  
睦月たつ 燈明あかる古き家に 年神棚をまつるもいくとせ  
今年は 平成最後の年なるも。災転じて 福の來よかし

## 久 我 田 鶴 子

明日香

・羊

埋めもどされしまあるい丘に日は当たり高松塚となほ呼びかかる  
暁近くなりても霜の残る田を指さしながら歩めり友と  
みかん山ひだりに見つつのその先へみちびかれ着く橘の寺  
飛鳥川わたりしさきの石舞台男うごくは枯れ草を刈る  
史を学び明日香のひとにならむとし詠ひつけし『つばめの射程』  
にんげんの厄を盗みとるといふ都合よき神ひとはあみだす  
みちしるべにみちびかれつてしまよひつつ一日明日香のふところのなか

# 香川進の生きものの歌 5 田土 成彦

○現代歌人協会主催・公開講座

## ザ・巨匠の添削。

△添削から探る歌人の技と短歌観

・スイッチを入れれば回らん廃艦の砲塔 蜻蛉の翅<sup>あきつ</sup>が乱舞す

『印度の門』より

正岡子規、若山牧水、島木赤彦、前田夕暮、  
太田水博、駿遠空、近代短歌の巨匠たちは  
弟子や投稿の作品にどのような添削を行ったのか。

香川進の年譜に「昭和三十四年 ベトナム、ビルマ、印度等

に長期出張」とある。当時まだ太平洋戦争の傷痕がいろいろなところに残っている状況だったのだろう。抽出歌の一連では海

岸近くに放置されている半ば壊れた小艇などを住居としている現地の人などの歌も見られる。先の大戦ではシンガポールを目指して英仏の軍を追撃した、そんな戦場の一場面でもあるのだ

ろう。この廃艦はおそらく日本軍の残していくものだろう。十有余年の歳月が過ぎて砲塔がまだ機能を保っているとは考えられないが、作者にとっては愛憎と悔恨のいり混じった物体であ

あったに違いない。現実に返れば、そこには硝煙の匂いもないし、号砲の音も無い。ただただ蜻蛉の乱舞する静かな空間があるだけであった。言わば、修羅を実体験として持つ作者にとっては、この平安はある種の「虚」であったかも知れない。

「廃艦の砲塔」と「蜻蛉の乱舞」およそ考へつかない突飛な組み合わせであるが、それがひとつ目の絵として出来上がっていることにも不思議な感動を覚える。先の大戦と言つても筆者はそれを知らない。時間の波にのみ込まれてゆく様様な現実のひとつが、この歌を読むことによつてリアリティーをもつて迫つてくるのは歌の力なのだろうか。



第一回 四月十七日(火)

「正岡子規」 講師・さいとうなおこ 司会・奥田亡羊

第二回 五月十五日(水)

「若山牧水」 講師・伊藤一彦 司会・笹公人

第三回 六月十九日(火)

「島木赤彦」 講師・大辻隆弘 司会・奥田亡羊

第四回 七月十七日(火)

「前田夕暮」 講師・山田吉郎 司会・梅内美華子

第五回 九月十八日(火)

「太田水博」 講師・木村雅子 司会・笹公人

第六回 十月十六日(火)

「秋山佐和子」 講師・秋山佐和子 司会・梅内美華子

△案内

△会場 学士会館

△開催 午後六時~八時 (受付開始 五時三十分)

△聴講料 前売り六回通し=六千円 (三月末〆切)

聴講を希望される方は、聴講料 現金書留または郵便為替を添えて、三月末までに左記おてに郵送でお申込み下さい。聴講券をお送りいたします。  
また、一回ごとの聴講を希望の場合は、聴講料一千五百円にて当日受付いたします。  
なお、現代歌人協会会員の方は無料です。

〒170-0003

東京都豊島区駒込 1-35-45(502) 現代歌人協会 公開講座係

## 秋の訪れ

角田 玲子

ゴルフ

一雨がすぎゆくことに木々めざめ秋の訪れ冷えてただよう  
白萩のたわわな枝に咲きほこる短い時期の朝の散歩道  
切りとりて一輪部屋に置くだけであたり漂う木犀の香の  
睦まじく茶のみ話の聞こえくるムクゲの白咲く雨あとの午後  
手に取りてみたくなるよな可憐なる花に会いたし秋ふかみゆく

電飾の取り付け始まりがんじがらめ静かに立つ木姿かわりゆく  
閉じられたまま持ち帰る雨傘のごとく事もなく一日終える

読みかけの本の葉をはずすごと約束ごとをはぐらかしおり  
メールという便利なものを遠ざけて私の文字の便り認める  
それなりの秋に逢うため秋色のブラウスはおりスパーに行く  
少しずつ秋の空気は冷えるかな南天の実の赤み増しゆく  
十月のカレンダー捲りてあと一枚思わぬ早さ シクラメンの赤

短歌と前後して始めたゴルフも振り返れば二十五年の年月を経ていました。やり始めた頃は、他人の目が気になりクラブを振る事が出来ず隠れるように怖じ怖じと隅の方で練習していた事を思い出しました。  
慣れとは恐ろしいもので月日と共に、とにかく夢中になり用事のない日は練習場に通い色々なクラブを順番に打って、あれこれと悩みながら十三本位のクラブを使いわけ打っていました。友人に誘われ本コースにも出るようになり18ホールをラウンドする楽しみも味わいクラブ会員になり山の空気や四季おりおりの鳥の囁りや様ざまの花と巡り合いながらスコアを競い合いました。「ホールインワン」も出来ました。

他人は「静と動の両方楽しんでいるね」と言ってくれますが、ゴルフも短歌も奥深くて思うように出来なくて自問自答の日々の繰返しだった気がしています。  
でも、両方とも子育てを終えての私のかけ替えのない趣味となり大切にしています。そのお陰で沢山の人と出会い教えも頂き感謝の気持ち一杯です。ゴルフのラウンドの回数は減りましたが、今も当時の仲間と会い他愛ない話に夢中になっています。

## 今月の二人

山峡の暮し

小原 静子

地下足袋をはいて

明けを透くカーテン開き今日のわが仰ぐ北山見下ろす棚田  
おぼつかな足にフィットす地下足袋にしゃきっと立ちて一輪車おす  
猪除けの柵に囲まれ育ちきし野菜の色香に触れて腰のす  
虫喰い菜を「虫が付くから安全」と胆の据わった嫁は手を持つ  
トラクターのエンジンの音ふいに止み昼のひととき背戸のうぐいす  
孫が植え子は苗箱の運び役息合うコンビに植田ひろがる  
さりげなく気遣いくるる孫と立つダムの水面も花の満開  
二つ三つ落花見せつつ夏空の凌霄花杉の穂を超す  
ありなしの風にさゆらぐ稻の花この小さきがいのちはぐくむ  
灼熱の陽を反しつつ落つる水穏りゆく田のみのてを奔る  
無我夢中に若さきそいし山の田に垂るる稻穂を独り見て立つ  
ささやかに耕して來し峡の田を退職したる子に委ねたり  
代替り甥姪集う夫の忌に香焚くひとりいたく老いたり

山間の兼業農家に嫁いで三年目に義母が亡くなりました。昭和三十年代、集落に勤め人は我が家だけ、砂利敷きや草刈り等の共同作業は平日に行われていました。大に代わって参加し、農業や林業で鍛えたお父さん達に色々教えて頂き乍ら夢中で働きました。一人前の仕事は無理でも、せめて格好だけは整えようと履いたのが地下足袋でした。びたりと足を守ってくれる地下足袋が気に入り、以来離さず愛用しています。

最初は見様見真似の農業で、近所の方に助けて頂きました。静かな自然の中で、僅かな棚田と畑を一人で耕作する事は苦にならず、寧ろ自分の思い通りに働けることが幸せでした。特に秋の収穫を終えた時の安堵感と喜びは格別です。地下足袋を履き田畑を動き回るのが、六十余年変わらない私の暮しであり、短歌の素材であります。

楽しい歌会で、私は美しい叙事の短歌を詠めません。見た事や行った事の報告の歌ばかりです。渚会長の山口卓之先生・大山クラブの佐久間ミツ子先生の御指導を頂きました。暮しの短歌と共に山峡の美しい花々、かわいい生き物を楽しく詠む事が出来たらいいなあと思ひます。

◆今月の二人・角田玲子作品評◆

### 読みかけの本の葉を

短歌とゴルフ、静と動の両方を楽しんでいるという角田さんは、四国の坂出市在住。

・一雨がすぎゆくことに木々めざめ秋の訪れ冷えてただよう  
一雨ごとに木々が目覚めてゆくと言えば春かと思うが、ここでは秋の訪れ。昨年の夏の、あの猛暑の後では、雨が降ることに空気が冷やされ、ぐったりしていた木々が目覚めていたというのも頷ける。

・睡まじく茶のみ話の聞こえくるムクゲの白咲く雨あとの午後  
雨上がりの午後、木槿の花の白もよみがえったように見えたことだろう。そこに聞こえて来る睡まじい話し声。なにかホッとするような時間であつたにちがいない。「茶のみ話」と「茶飲み話」「ムクゲ」と「木槿」どちらの表記の方がいいか?

・読みかけの本の葉をはずすこと約束)ことをはぐらかしおり  
どんな約束事なのか具体的に解らないだけに、はぐらかしているのは何故なんだろうと惹きつけられる。しかも、それはぐらかし方たるや、「読みかけの本の葉をはずすこと」である。この比喩も巧み。事々しくなく、さりげなく、でも確かな実行力をもって、知恵者の行為とも思われた。

・メールという便利なものを遠ざけて私の文字の便り認める

メールの便利さは承知している。けれども、私はそれをしない。作者の主張は、きっぱりしている。「私の文字の便り」それを認めるのだ、と。よくぞ言ってくれたという声も、どこから聞こえてきそうだ。便利さの追求という一方に向流れているかに見える社会に対する、ささやかなアンチの声である。

◆今月の二人・小原静子作品評◆

### 稻の花この小さきが

評者・久我田鶴子

地下足袋を履き田畠を動きまわるのが、六十余年変わらない「私の暮らし」だという小原さんは、千葉県の鶴川市在住。

・おぼつかな足にフィットす地下足袋にしゃきっと立ちて一輪車おす

馴染んだ地下足袋を履けば、おぼつかない足でもしゃきっと立てて、一輪車も押せる。作者の地下足袋愛は、並々でない。初句「おぼつかな」では、覚束ないとということを言って切れる感じになってしまって、「おぼつかなき」に。「フィットす」は「地下足袋」にかかるのだろうから「フィットする」に。

・虫喰い菜を「虫が付くから安全」と胆の据わった嫁は手に持つ

・孫が植え子は苗箱の運び役息合つコンビに植田ひろがる

虫など恐れる様子もない嫁に対しても、「胆の据わった」と評価している。息子と孫の田植えの様子を見ても、「息合うコンビ」と頼もしげに見ていく。こうした家族に囲まれて、小原さんの日々の充実がある。

・二つ三つ落花見せつ夏空の凌霄花杉の穂を超す

杉の木の天辺を超えた凌霄花は今、花の真っ盛り。夏空にオレンジの鮮やかな色も見えるようだ。夏の花の生命力の強さを詠うことは、作者の「いのち」への讃美である。

「いのち」への思いは、この歌にも。かすかな風にも揺れる小さな稻の花。「この小さきが」に、身を低くして寄って、稻の花に感嘆している様子が、實に生き生きと表現されている。

私と短歌との出会いは、市の広報で短歌の講座の募集があったことです。講師は今は亡き石橋昭一郎先生。会場は近くの青年の家でした。募集人数は二十名余りと記憶しております。その頃から、現在の支社長の小泉泰清先生も存じ上げておりました。月一回の講座が待ち遠しいくらいになつた頃、石橋先生に結社に入るように勧められました。まだまだ未熟な私でしたが、入社していただきました。鏡子支社どうなかみ支社の吟行会にも参加し、房州方面へ日帰りの旅。養老渓谷等々、その都度いろいろ御指導いただきました。それから三十年余、今日に至っています。

初めての全国大会参加は鬼怒川大会で、大先輩の方々に同行させていただきました。浅草から特急で一時間余、楽しいひとときでした。昼食をとつて、それぞれ分科会にての御指導。時の流れが早いと思いました。この時は、一緒に行つた石毛敏雄さんが体調を崩されてしまい、皆さんショックを受けました。次の日は記念撮影や批評会。私も山本友一先生の七首に選んでいただき、先輩の方々に「来た甲斐があつたね」と励まされて、とても心強く元気になりました。その時に選んでいたいた歌は、今でも私の心の宝物で、我が家家の床の間に飾つてあります。東西足洗、椎名内、野中、浜。八十年、

その後も、鴨川大会、サンライズ九十九里大会、いつもご一緒にさせていただき、御指導を受けました。今は亡き渡辺さんの「人と話をすれば、葉や肥料になる」という言葉にも励まされました。

話は変わりますが、我が家家の墓地には白井大翼先生の歌碑があります。私が小さい頃、親戚にあたる白井大翼さんから祖父の

百年、百五十年。碑は文字が薄れ、理解できないような状態ですが、墓参りにゆく度、一首一首と憶えてきたような気がします。田舎のお土産は子供にも「お香」であったそうです。祖父が甘味でもと苦笑していました

ことが思い出されます。

また全国大会の話に戻ります。東京両国大会、福島大会、信州軽井沢大会と、勉強会と思って参加しました。

## 私と短歌との 出会い

### 199

来栖万佐子

ところへ「霸王樹」という月刊誌が送られておりました。小一、二年くらいだった當時の私には理解できませんでしたが、大翼の歌碑がいくつもあります。また、寺子屋の生徒の碑には、正面には歌が、廻りには生徒の名前が刻まれ、昔のことが偲ばれます。東西足洗、椎名内、野中、浜。八十年、

短歌と出会い、地中海の皆様に御指導いただき、お世話になりました。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。